

あいさつしないのはだれ？

研究開発部
水野 映子

生活の基本はあいさつから、と言われる。現代の子どもはあいさつをしなくなったという声もあるが、果たしてそれは本当だろうか。また、本当だとすれば、どのようにすればよいのだろうか。

< 祖父母世代の懸念 >

まずは、子どもたちの祖父母世代の心の内を聞いてみよう。

世代間交流活動研究会は、65歳以上の高齢者を対象とする調査を実施し、「小・中・高校生ぐらいの子どもたち」と何か一緒にするような状況に置かれた場合に心配・懸念することをたずねている。図表1をみると、10項目のうち「子どもたちがしつかりしたあいさつや言葉づかいをすることができない、ということ」を心配である（「とても心配である」＋「やや心配である」）と答えた人の割合（74.4%）は、「子どもたちがわがまま勝手に行動する、ということ」（80.3%）に次いで高い。年配の人にとって、自分の孫ぐらいの年齢の子どもがあいさつをするかどうかは、かなり重要なことらしい。

< 他人よりも少ない家族へのあいさつ >

では、子どもたち自身は、きちんとあいさつをしていると考えているのであろうか。

ベネッセ教育研究所は、中学生が家族と近所の人それぞれにあいさつをする程度を調査している（図表2）。中学生全体をみると、「朝起きたら家族

に『おはよう』と言う」割合は、「とてもそう」「わりとそう」「少しそう」を合わせて66.7%であり、「近所の人に会ったらあいさつをする」割合（計86.8%）より少ない。子どもたちがあいさつをしなくなっているとすれば、他人に対してよりもむしろ身内に対してである可能性がある。図表1でみた高齢者の懸念も、家族にあいさつをしない孫などの行動を目にした結果なのかもしれない。

学年別にみると、家族に朝のあいさつをする割合は、中1で73.2%、中2で69.8%、中3で60.1%と徐々に下がる。一方、近所の人にあいさつをする割合は、中1で84.0%、中2で87.6%、中3で88.0%と、むしろ上がっている。

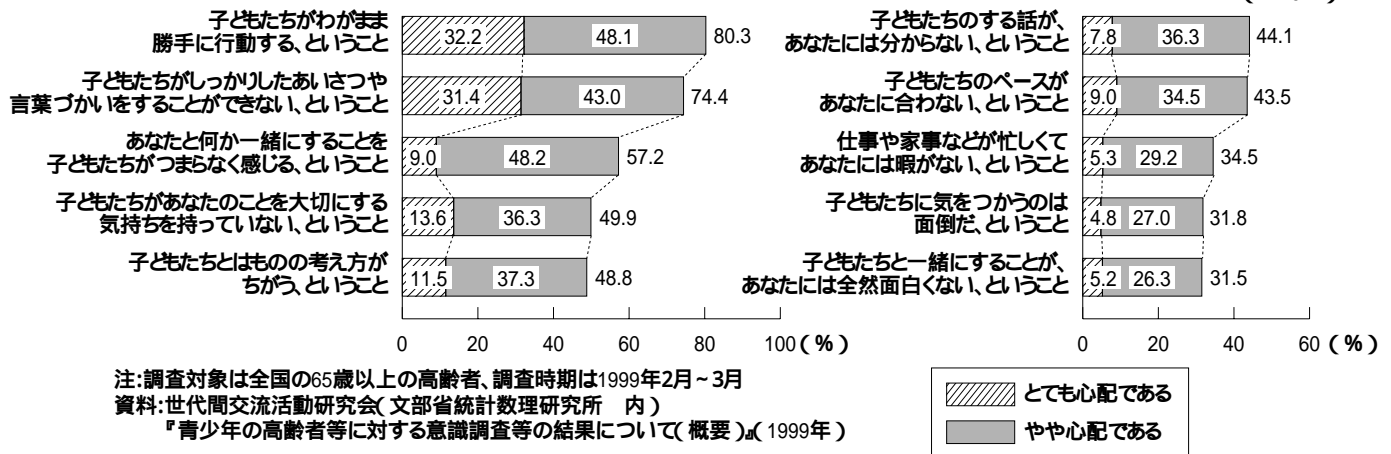
< 親が声をかけなければ >

今度は逆に、家族が子どもに対してどの程度あいさつをしているかをみよう。

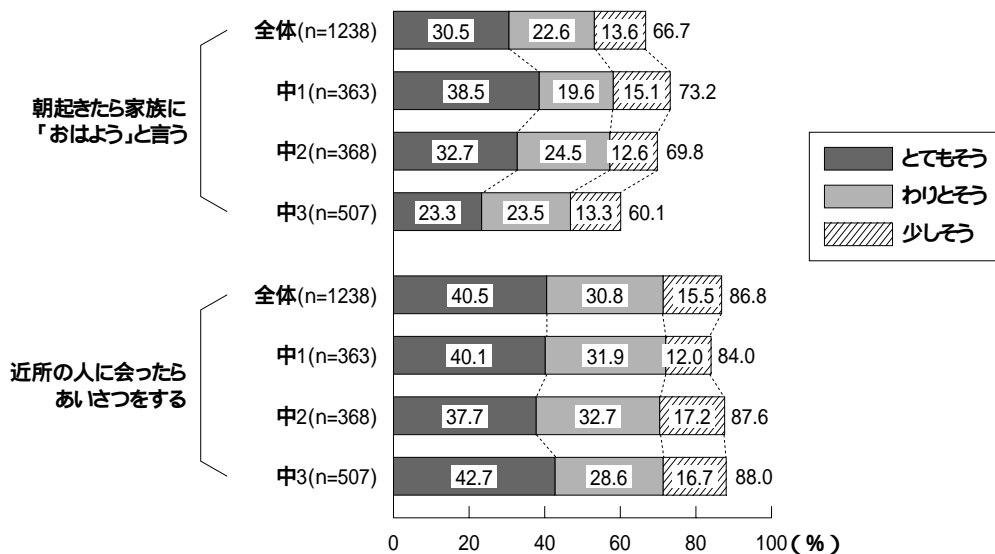
東京都立教育研究所の小中学生を対象とした調査には、家の人「朝、『おはよう』と声をかけてくれる」かどうかという質問がある。図表3をみると、全体では83.0%の子どもが、家の人に「おはよう」と声をかけられることがある（「よくある」＋「時々ある」）と答えている。だが、その割合は子どもの学年が上がるにつれて下がり、中3では75.0%になる。つまり、中3の4人に1人は家族から朝のあいさつをされることがない。

確かに、子どもが成長するにしたがい、家族が接触する機会は少なくなり、忙しい朝にはゆっくり話す時間もなくなるのかもしれない。だが、せめて「おはよう」の一言くらいはお互いに交わしたいものだ。子どもがあいさつをするようになるためには、まずは親を始めとする大人が率先して子どもに声をかけなければならないのではないか。

図表1 小・中・高校生くらいの子もたちと何か一緒にするような状況に置かれた場合に、心配・懸念すること (n=1644)



図表2 家族、近所の人にあいさつをする程度



LDI WATCHING

図表3 家の人が朝、「おはよう」と声をかけてくれる程度

